

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320059

研究課題名（和文） 文学・映像における「分身」テーマの総合的研究

研究課題名（英文） On the Motif of “Double” in Literature and Visual Arts

研究代表者

高木 繁光（TAKAGI SHIGEMITSU）

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：00288606

研究成果の概要：

本研究は、文学作品ではナボコフの小説『絶望』、ドストエフスキイの小説『おかしな男の夢』、マラルメの『イジチュール』、中国の『紅樓夢』を、映像関係ではアレクセイ・ゲルマンなど 50 年代のソ連社会を舞台とした近年のロシア映画、エイゼンシュテインの映画理論、30 年代から 50 年代のドイツ映画と親近性をもつ近いマキノ雅弘作品などを主たる分析対象として、各研究者がそれぞれの分野で、「二重世界」、「二重文化性」、「二重の知覚」といった二重性を生きた分身の主体のあり方について考察したものである。ここで分身の主体とは、ジギルとハイドのようなく病的現象としてではなく、あれでもありこれでもあるという複数的存在様態を肯定してゆく創造的エネルギーを備えたものとして捉えられている。あれかこれかという単一的世界像の見直しを促すこのような分身テーマは、複製技術時代における文学と思想と映像の相互関係を理解する上できわめて有効な手掛かりとなりうるものである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	10,300,000	3,090,000	13,390,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：分身、映画、文学、近代、民衆、主体、分裂

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初において、高木は、E. T. A. ホフマンの『砂男』における「分身」を論じたフロイトの論考「無気味なもの」を手掛かりに、フリッツ・ラングの一連のマブゼ

映画の分析に着手し、そこにゴダール、リヴェット、レネなど現代映画にも通じる分身テーマを見出していた。諫早は、ドストエフスキイの『分身』とナボコフ、三島、

ボルヘスらにおける分身テーマを比較することで、19世紀文学の分身テーマと、20世紀の分身テーマの相違について考察を始めていた。メーリニコワは、1930-80年代ソヴィエト時代のロシア映画資料を収集し、そこで流行した二重スパイという「分身」テーマに関心を寄せていた。初年度にはノブゴロド大学で在外研究中であった松本は、ドストエフスキイ作品を中心にロシア文学史上の分身テーマについて調査を行っていた。大平は、エイゼンシュテインの映画理論における創作者の存在論的〈分裂〉というテーマを、一連の論考において考察していた。銭嶋は、中国文学史における「分身」と、西洋の文学史・芸術史における「分身」の対応を検証するため、説話における中国的「分身」と西洋的「分身」との差異の分析に着手していた。宮寄は、マラルメにおける〈身体〉という位相を、詩人の〈分身〉としてのイジチュールの狂気と、同毒療法による詩人自身の狂気の克服過程との関係から考察していた。このように多様な研究分担者が、それぞれの分野における自分の研究と「分身」テーマとの関連の重要性を強く意識していたことを出発点として、本研究は開始された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロマン主義文学に現れた「分身」テーマをいま一度検証することからはじめて、それが19世紀中葉から20世紀における近代社会の発展、科学技術の進歩の中で変容してゆく過程を明らかにすることであった。ベンヤミンが「複製技術時代」と呼ぶ近代の技術社会において、ロマン主義的な「分身」テーマがどのように引き継がれ、科学技術とどう関係し、大都市の民衆像にどのような影を投げかけるのか、またそれが19世紀から現代に至る思想状況、あるいは印象派など近代絵画の成立、フロイトによる精神分析の誕生、映像という新たな表現媒体の出現などの出来事と相互にどう関連し合っているのかが考察された。さらに本研究は、西洋的な近代技術の移入が日本、中国の文化・

芸術にどのような変容をもたらしたか、分身というテーマが、近代以降の日本、中国の文学、映画においてどのように現象しているかをも射程に入れることで、比較文化論的意義も有していた。すなわち、本研究で問われたのは、何よりも分身というテーマと、近代の技術社会の関係であり、それは現代のテクノロジーの問題とも密接に関わるものとしてあった。

3. 研究の方法

本研究では、研究分担者7人を①映像研究班、②文学研究班に分け、①には高木、メーリニコワ、大平が、②には諫早、宮寄、銭、松本が加わった。研究代表者である高木は映像研究班と文学研究班とを結ぶ総括の役割を担った。

映像研究班は、「分身」テーマが描かれた映画作品の調査・収集を行い、高木はヨーロッパ映画およびアメリカ映画、メーリニコワはロシア映画と日本映画、大平は中東欧映画およびアジア映画にそれぞれ重点をおいた。また、映画理論の歴史についても考察を進め、高木は戦後のフランス・イタリア・ポルトガル映画、メーリニコワは戦後のソヴィエト映画、大平はエイゼンシュテイン及び中東欧諸国の映画理論を分析するとともに、これらの理論と「分身」テーマとの関わりについて、議論を通して互いに理解を深めていった。

一方、文学研究班は、ロマン主義以降の文学における分身テーマと現代文学における分身テーマの相違と共通性に注目しながら研究を進めた。まず宮寄はマラルメ以降のフランス文学を中心に英米の文学にも目配りしながら「分身」テーマを扱った作品の収集に努め、松本はドストエフスキイ作品における分身テーマと、それが20世紀の文学・思想に及ぼした影響について考察し、諫早は日本文学を中心に、これと関連する西欧諸国の文学を渉猟し、銭は19世紀から20世紀にかけての中国文学に目を向けた。さらに、20世紀に映像化された分身譚についての調査を、映像研究班との共同作業として行った。

4. 研究成果

メーリニコワは、ゲルマンの『フルスタリョフ、車を！』、ウチーチェクの『宇宙を夢見て』、ルビンチクの『南京の風景』という50年代のソ連社会を舞台とした近年のロシア映画を主な対象として、今日のロシア社会において分身テーマが頻りに扱われる意味を分析した。諫早はナボコフの小説『絶望』の登場人物たちが背負っている二重文化性について分析し、他人が相違しか認めないところに類似を見る「二重視」の能力を、亡命者特有の感覚として位置づけ、一国文化主義を越える亡命文学の意義を強調した。大平は、エイゼンシュテインのモニタージュ理論が、近代的主体には相違しか見えない二者の間に「パトスの深層における原始・イメージ思考」による類似を見出すことであると指摘し

つつ、しかし、これが芸術創造の方法論として成立するには、ロゴスの表層からパトスの深層への退行と同時に、再びロゴスの領域へと反転する双方向的運動＝「二重の知覚」が不可欠であることを論じた。高木は、30年代から50年代のドイツ映画に頻出する〈真〉と〈偽〉の転倒のテーマが、日本のマキノ雅弘の映画にも見られることに着目し、真偽の反転、〈偽〉の〈真〉に対する優位を演じる演劇的主体が、近代的リアリズムに反し、外見を演じることに於いて内面的葛藤を捨象しつつ、文楽人形のような様式的存在に近づいてゆくことを指摘した。松本はドストエフスキイの小説『おかしな男の夢』に登場する「地球」について、もとの地球もとの地球の分身が「今ここで、ふたつ同時に存在する」「二重のありよう」としての世界であると論じ、この弁証法的「とんぼ返り」を経た二重世界で一人の子供の苦しみを分身的主体として引き受け、「全世界的な事物の秩序に責めを負って」ゆこうとする主人公のあり方を論じた。銭鷗は『紅樓夢』における夢の構造を荘子の胡蝶の夢との関連において考察した。宮寄はマラルメ詩学における分身テーマをイジチュールの狂気を手がかりに考察した。

以上の成果を総合することで、ベンヤミン、ベルグソン、フロイトらがすでに捉えていた複製技術時代における主体のあり方を、文学・映像作品をとおしてある程度明らかにできたと思う。真偽の転倒した二重世界を生きるこの分身的主体は、各研究成果が示すように、単一の世界像においてあれかこれかを選ぶのではなく、あれでもありこれでもあるという主体の複数性を肯定する強度を備えている。分身テーマのこのような創造的意義を捉えた本研究は、今後さらに複製技術時代における文学と思想と映像の相互関係をさらに精緻かつ広範に考察する上で、きわめて有効な手掛かりとなりうるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計23件)

1) 高木繁光 マキノ雅弘——「ノリ」の映画術——、『文学・映像における「分身」テーマの総合的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 84-99, 2009. 3

2) 高木繁光 ニーチェと映画的思考、「言語文化」第9巻第2号(同志社大学言語文化学会)、査読有、p. 189-212、2006. 12

3) 高木繁光 差異化される映画—ブレヒト演劇と映画—、「言語文化」第9巻第1号(同志社大学言語文化学会)、査読有、p. 71-95、2006. 8

4) 諫早勇一 『絶望』と二重世界、『文学・映像における「分身」テーマの総合的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 8-21, 2009. 3

5) 諫早勇一 プラハのロシア文学——ベームと〈庵〉を中心に——、「言語文化」第10巻第1号(同志社大学言語文化学会)、査読有、p. 101-119、2007. 8

6) 諫早勇一 亡命ロシアの新聞・雑誌——中東欧諸国における第一次ロシア亡命文化試論——、『スラヴ世界における文化の越境と交錯』(科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)、査読無、p. 1-21、2007. 2

7) Юичи Исахайя, Набоков и набоковедение: девяностые годы, Левинг, Ю. и Сошкин, Е. (ред.) *Империя N: Набоков и наследники*, Москва: Новое литературное обозрение, 査読有、С. 181-192, 2006

8) 諫早勇一 同化と共生——中東欧諸国における亡命ロシア文化序説——、「言語文化」第9巻第1号(同志社大学言語文化学会)、査読有、p. 97-115、2006. 8

9) 松本賢一 双子の惑星——ドストエフスキイの『おかしな男の夢』を読むために——、『文学・映像における「分身」テーマの総合的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 22-43, 2009. 3

10) 松本賢一 ドストエフスキイ『未成年』における〈благообразие〉について、「言語文化」第11巻第2号(同志社大学言語文化学会)、査読有、p. 191-244、2008. 12

11) 松本賢一 Крушение «мессианской идеи» у Раскольникова, Достоевский и современность, *Материалы Международных Старорусских чтений 2006 года*. 査読有、p. 192-203, 2007、

12) 松本賢一 東方問題とドストエフスキイの汎スラヴ主義の淵源、『スラヴ世界における文化の越境と交錯』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 22-38、2007. 2

13) Ирина Мельникова Двойники в новейших российских фильмах, 『文学・映像における「分身」テーマの総合的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 44-67、2009. 3

14) Мельникова И.В. Японские паломники к Л.Н.Толстому. Вопросы японоведения, № 2.

Материалы научной конференции, посвященной 110-летию основания кафедры японоведения Санкт-Петербургского университета. 査読有、C.181-193、2008.2

15) Irina Melnikova. Constructing the Screen Image of an Ideal Partner, in Yulia Mikhailova and M. William Steele ed. *Japan and Russia: Three Centuries of Mutual Images*, London: Global Oriental Publishers, 査読有、p.112-133、2008

16) イリーナ・メーリニコワ 1930-60年代のソヴェート映画に見る日本 『視覚メディアにあらわれた日露相互のイメージと表象—日露関係の理解のために』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 112-134、2007. 5

17) Мельникова И.В. Славянские народы в зеркале советского кино. 『スラヴ世界における文化の越境と交錯』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 88-114、2007. 2

18) Мельникова И.В. Харбинский соловей и московские стилисты: кино, музыка и проблема культурной идентичности. Часть 1. «Мой соловей». 「言語文化」第8巻第4号、査読有、p. 691-718、2006. 3

19) 大平陽一 ロシア芸術論から見たレヴィ=ストロース、『思想』第1016号、査読有、p. 162-182、2008. 12. 5

20) 大平陽一 カレル・タイゲの映画論、

『西スラヴ学論集』第11号、査読有、p. 44-66、2008. 3. 31

21) 大平陽一 イズム! イズム! イズム! —カレル・タイゲのブックデザインにおける諸潮流の輻輳、『スラヴ世界における文化の越境と交錯』(科学研究費補助金研究成果報告書)、査読無、p. 129-156、2007. 2

22) 大平陽一 〈非意図性〉としての〈ファクトゥーラ〉、「天理大学学报」第213輯、査読有、p. 21-36、2006. 10. 26

23) 銭鷗 “哲学”への着眼点とその周辺—王国維と桑木巖翼をめぐっての予備考察—、『近代日中関係人物史研究の新しい地平』、雄松堂、査読有、p. 161-180、2008. 2

[学会発表](計19件)

1) 諫早勇一 モラフスカー・トシェボヴァーのロシア・ギムナジウムをめぐって、科学研究費補助金「RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究」2008年度冬季研究会(新潟大学、2009年2月23日)

2) 諫早勇一 プラハのロシア文学—ベームとスローニム、科学研究費補助金「RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究」第1回研究会(同志社大学、2007年7月29日)

3) 松本賢一 ゴシマの腐臭——『カラマーゾフの兄弟』における復活モチーフ、ドストエフスキイの会186回例会、2008. 5. 17.

4) 松本賢一 スターラヤ・ルッサとドストエフスキイ、ロシア・ソヴェート文学研究会、2007. 11. 24.

5) 松本賢一 ラスコリーニコフの思想の二重性によせて、第21回スターラヤ・ルッサ国際連続講演会「ドストエフスキイと現代」/ ロシア、スターラヤ・ルッサ、ドストエフスキイ博物館、2006. 5. 22.

6) 松本賢一 スチュアート・ミル、ストラホフ、ドストエフスキイ、国際学術会議「大英帝国の文学とロマンス世界」/ ロシア、ノヴゴロド、ノヴゴロド国立大学人文科学研究所、2006. 9. 20.

7) 松本賢一 ドストエフスキイと芥川、国際学術会議「リハチヨフ生誕100年記念ノヴゴロヂカ」ロシア、ノヴゴロド、クレムリン、2006. 9. 21.

8) 松本賢一 『未成年』における「思想」の別側面、第31回国際連続講演会「ドストエフスキイと世界文化」/ ロシア、サンクトペテルブルグ、ドストエフスキイ博物館、2006. 11. 10.

9) Мельникова И.В. Толстовское учение и новые религии Японии: основатель колонии «Иттоэн» Нисида Тэнко. Одиннадцатая ежегодная конференция «История и культура Японии». Российский Государственный Гуманитарный Университет, Москва. 10 февраля 2009 г.

10) Мельникова И.В. Лев Толстой и новые религии Японии. 6-я международная конференция «Лев Толстой и мировая литература», Ясная Поляна, 12 августа 2008г.

11) Irina Melnikova. The Soviet-Japanese Cultural Exchanges in the 1950-60s: Screen Images and Reality. 12th International Conference of the EAJS, Salento University, Italy. 2008, September 23.

12) イリーナ・メーリニコワ ロシアにおける日本古典文学の受容、国際ワークショップ「日本語を通じた文化の対照研究」北海道大学文学部、2008.8.6.

13) Мельникова И.В. Японский университет Досия и Л.Н.Толстой. Научная конференция, посвященная 110-летию основания кафедры японоведения Санкт-Петербургского

университета, СПбГУ, Санкт-Петербург. 28 февраля 2008 г.

14) Мельникова И.В. Л.Н.Толстой и японские христиане из школы Досия. 5-я международная конференция «Лев Толстой и мировая литература», Ясная Поляна, 15 августа 2007 г.

15) Irina Melnikova. Screen Representation of Russian –Japanese Encounters: Film, Music and Cultural Identity/ 41-st Annual Conference of Asian Studies on the Pacific Coast, University of Hawai'i, Honolulu. 2007, June 16.

16) Мельникова И.В. Музыка, кино и культурная идентичность: о русских героях японского кино. – Восьмая ежегодная конференция «История и культура Японии». Российский Государственный Гуманитарный Университет, Москва. 15 февраля 2006 г.

17) 銭鷗 使われなくなったいくつかの概念——王国維と中国近代における批判理性、京都大学人文科学研究所現代中国研究センター、2009. 1

18) 銭鷗 王国維と明治学術の最前線、記念王国維誕辰130周年暨国学術研討会、中国海寧市、2007. 11

19) 銭鷗 <哲学>への着眼点とその周辺——王国維と桑木厳翼をめぐる予備考察、関西大学アジア文化研究センター第2回国際シンポジウム『近代日中人物交流史研究の新しい地平』、2006. 6

[図書] (計 1件)
大平陽一 『映画的思考の冒険』、共著、世界

思想社、箭内匡（編）、箭内匡、足立ラーベ加代、ヌリア・ロペス、前田茂（共著）、p. 79-118、2006. 6. 26

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 繁光

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：00288606

(2) 研究分担者

諫早 勇一

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：80011378

松本 賢一

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：00309072

メーリニコワ イリーナ

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：10288607

銭 鷗

同志社大学・言語文化教育研究センター・準教授

研究者番号：70298701

大平陽一

天理大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：20169056

宮寄克裕

同志社大学・言語文化教育研究センター・専任講師

研究者番号：00411075

(3) 連携研究者